

架空の三流画家 ユアサエボシの略歴

1924年（0歳）

千葉県東葛飾郡布佐町生まれ。本名湯浅浩幸。

1933年（9歳）

両親に連れられ上野にハーゲンベックサーカスを観に行く。

1938年（14歳）

布佐尋常高等小学校卒業。画家を志す。

1940年（16歳）

挿絵画家の小林秀恒に弟子入りを志願するも病気を理由に断られる。

東京で看板屋の仕事に就く。

『日刊美術通信』に掲載されていた福沢一郎絵画研究所の募集要項を見て入所を決める。研究所でエルンストの『百頭女』を見て衝撃を受ける。エルンストに倣い画集や雑誌の図版を組み合わせた絵画を制作する。

1941年（17歳）

福沢一郎が治安維持法の嫌疑で逮捕されたため研究所は閉鎖。看板屋の仕事に専念する。

1943年（19歳）

閉鎖となっていた研究所で留守番をしていた山下菊二と出会う。山下が描いていた《日本の敵米国の崩壊》の制作助手を務める。

戦時下の子供たちが愛読した雑誌『少年倶楽部』の挿絵を使ってコラージュ作品を制作する。

（戦時下では絵具も配給制になり、末端の作家たちは満足して絵画制作を行うことが出来なかった。ユアサも絵具が手に入らないときは、絵画制作の代わりにコラージュ作品を制作していた。）

1944年（20歳）

徴兵検査を受けるが、当時重度のヘルニアだったため戊種判定で不合格となる。

1945年（21歳）

進駐軍相手に瓦に似顔絵を描き日銭を稼ぐ。

（当時の似顔絵師たちはお互いの素性を詮索されぬよう、あだ名で呼びあっていた。ユアサはいつも寝癖が酷く逆立っていて、烏帽子のようであったことから“エボシ”と呼ばれるようになる。後にユアサエボシを作家名とする。）

進駐軍がもたらしたアメリカ文化の影響を受ける。

1947年（23歳）

山下菊二、高山良策らが結成した前衛美術会に参加する。

第1回前衛美術展に出品。以後1950年の第4回まで毎年出品する。

研究所時代の知人である加太こうじに頼み、紙芝居の着色を担当する“ヌリヤ”の仕事をまわしてもらう。

1950年（26歳）

兵庫県西宮市で開催されたアメリカ博覧会へ行き感銘を受ける。将来渡米することを決意する。

1951年（27歳）

政治色が強かった前衛美術会に嫌気がさし脱退する。

1953年（29歳）

第1回ニッポン展に出品する。

1956年（32歳）

ニューヨークに渡米する。レストランで皿洗いの仕事をしながら作品を制作する。雑誌、新聞など作品に使えそうなものを日々買い漁る。

岡田謙三、篠田桃紅らと交流する。

アクリル絵具に出会い以後制作に使用するようになる。

1958年（34歳）

ヘルニア再発のため帰国する。帰国途中に経由地のハワイで小田実と出会う。

アメリカで購入してきた雑誌記事をもとに作品を制作する。

自らの絵画を自嘲の意味も含め“舶来転地様式”と名付ける。

（福沢一郎絵画研究所でのシュルレアリスムの影響、進駐軍がもたらしたアメリカ文化の影響、前衛美術会でのルポルタージュ絵画の影響を受けながら、独自の絵画を展開する。）

1964年（40歳）

第8回シェル美術賞に《騎士》を出品して佳作入選する。

1965年（41歳）

京橋の貸画廊で個展を開催する。《魔術師》と共に“黒い紙芝居シリーズ”を展開する。

小田実と再会する。“黒い紙芝居シリーズ”は小田とともに個展に訪れた鶴見俊輔が名付けたもの。

東京オリンピック後の不況から作品が売れず生活苦になりガードマンの仕事始める。

1978年（54歳）

母親の死をきっかけに世間と距離を取るようになる。この頃には作品発表もほとんどせずアトリエに引きこもり制作に打ち込む。自身の過去作の模写もはじめる。

1985年（61歳）

アトリエ兼自宅が全焼する。作品や資料を外に運び出そうとした際に重度の火傷を負う。

1987年（63歳）

火傷の後遺症により逝去する。